

# 仙台藩遣欧使節 支倉常長の出自と現代に生きる子孫

2021. 8. 10 佐藤正喜

はじめに

江戸期慶長の時代、日本初の遣欧使節としてローマに渡航した仙台藩士・支倉常長のことは、明治期までは殆ど公開されず、当時の幕府禁教政策の絡みからデリケートな問題を孕んでいたことに起因すると推察される。我々からみて偉業を成し遂げた支倉常長は帰国後2年で没したとされるが、帰国後の彼個人の情報は殆どないとされる。筆者は、伊達氏の祖・朝宗の頃からの譜代の家臣であった支倉家(元姓伊藤)の末裔が現代に続いていることを知り、興味のままに調査したことを纏めてみた。

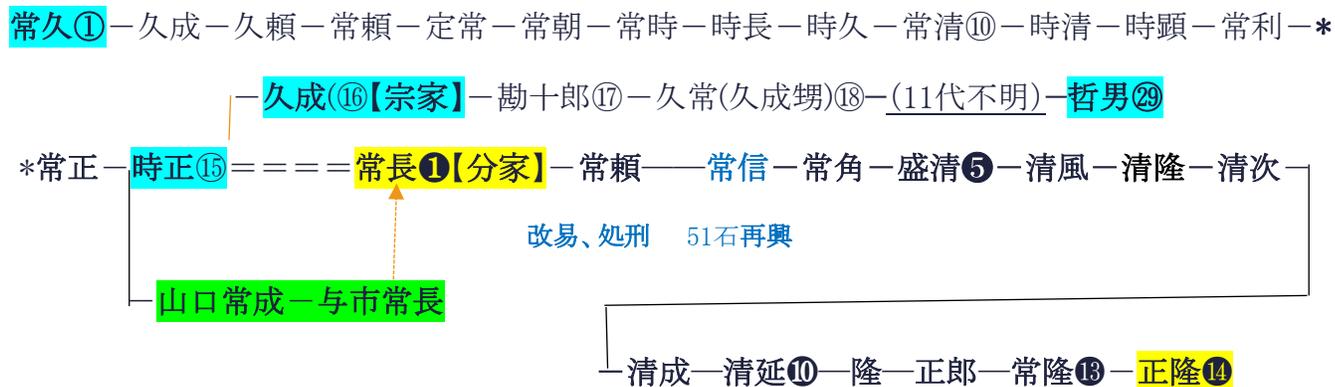
## 1. 支倉常長の出自

支倉氏は初め伊藤と称し姓は平氏。その祖先は高望王から代々続き、伊勢国国司に任ぜられて伊藤庄に住んだ伊藤常久を祖とする<sup>1</sup>。常久は平清盛に仕え、常州西方目代を任ぜられていた。ところが、源頼朝の軍に敗れ流浪し文治元年(1185)に伊達氏祖の念西に仕官が許され、常陸国筑波郡中村に居住したという。同5年(1189)奥州討伐の恩賞として、信夫郡山口邑(福島市山口)、伊達郡梁川邑(伊達市梁川町)、柴田郡支倉邑(柴田郡川崎町支倉)を賜ったという。

伊達氏祖の代からの譜代の家臣であったことになる。

## 2. 支倉家の家譜

伊藤常久を祖とする「支倉氏家系図」<sup>2</sup>、仙台藩家臣としての支倉常長の家系図<sup>3</sup>を合成した家譜を示すと下記になる。本家は29代(故人)、分家は14代(現当主)が知られている。



・2代目久成は伊達朝宗の命により長谷倉と改姓。13代紀伊守常正は伊達植宗、晴宗に仕え、主命により長谷倉の地に築城し上楯城と呼称。この頃から地名支倉が固定、姓は支倉と名乗るようになった。1200石。

・常長は1571年、常正の三子山口常成の子として羽州置賜郡長井荘立石邑(米沢市立石)に生まれる。幼名は与市(のち五郎左衛門、六右衛門)といい、父の常成は、伊達政宗公の父・輝宗公に仕えていた。常長が生まれたとき政宗公は五歳。その後、伯父支倉時正の養子となり、7歳から陸奥

国柴田郡支倉村(宮城県柴田郡川崎町支倉地区)の上楯城で長い青年期を過ごした。その後、時正に実子・久成が生まれると伊達政宗の主命により常長は時正との養子縁組を解消して分家し、家禄1200石を二分し、600石取りとなる<sup>4</sup>。

・常長の死後、常頼は家臣の切支丹の罪で改易・処刑(1640年)され断絶。3代常信の代に許されて51石で家名を再興<sup>4</sup>(1668年)。

### 3. 遣欧前の常長の事跡<sup>2</sup>

常長は、慶長遣欧使節に選ばれて歴史の舞台に出るまで600石の一介の中級家臣に過ぎず、現存する経歴記録は少ない。

・**茂庭綱元のもとで初陣** 上楯城は、養祖父の支倉常正が1545年に築城した連郭式(本丸・二の丸・三の丸を直線的に並べた形式)の山城で、現在も土塁や空堀の跡が残されている。

常長は18才で初陣。伊達三傑と呼ばれた伊達家の重臣・茂庭綱元に従い鉄砲隊長として相馬義胤軍と戦った(宇津志城攻防戦)。天正16年(1588)、支倉五郎左衛門与市(元服改名)。

・**政宗公の小田原参陣にお供** 20才のときに政宗公の百余騎を率いての小田原参陣に従い、「行路偵察」として先発。道々の地図作成、全工程の城塞関係図の作成、部落毎の状況などを調査し逐一報告する大任を果たした。天正18年(1590)、支倉五郎左衛門与市。

・**葛西大崎一揆討伐** 葛西・大崎残党鎮圧で宮崎城攻撃に参戦。天正19年(1591)6月、与市20才。天正19年7月に、一揆で投降してきた首謀者達を深谷に集めて謀殺(首謀者の深谷謀殺)した刺客団に常成・常長親子が加わっており、屋代景頼の一揆掃討の汚れ仕事を請け負っていた<sup>5</sup>。

・**九戸政実の反乱** 政宗公は京都に出向いていて与市は近習役として同伴中で、早馬での反乱の通報を受けた公は直ちに白石七郎と支倉与市に九戸行きを命じた。二人は早馬を馳せて帰国、伊達藤五郎実元に伝え、兵を整えて出陣した。与市の役割は伊達治家記録に「道筋調べ」とあり、政宗公は褒美として黒川郡大森邑に給地50余町歩を与えている。実父山口常成は幽閉を解かれ、後日の大崎葛西一揆御成敗代官として加美郡に出向く事になった。天正19年(1591)7月、与市20才。

・**政宗公に見いだされ、やがて朝鮮出兵で活躍** 1592年、太閤秀吉は朝鮮征伐(文禄の役)のため、配下の武将の連合軍14万を朝鮮半島に送り込んだ。政宗公も三千の軍勢を率いて出兵し、常長も義父時正とともに従軍して、「御手明衆(おてあきしゅう)」の頭20名に支倉六右衛門とある(改名)。「御手明衆」は、松明を持って夜の行軍で道を明るくする役で、1組30人の徒士から成り、戦場では鉄砲隊で、六右衛門は鉄砲隊長であった。

\*「朝鮮御供記」に、伊達藤五郎成実ほか支倉紀伊(義父時正)ら、御手明衆に支倉六右衛門の名。

・**六右衛門、公の裁定により分家を興し、折半し600石** 六右衛門25才  
慶長元年(1596)、義父に嫡男が生まれたことから、政宗公に本家と対等な分家を認められた。4年後、

実父常成は、以前に起こした鍋丸事件(川崎城の砂金氏との領地争い)がもとで切腹となり、常長もその連座責任を問われ、一時は閉門謹慎処分となったが知行地600石は保持された(1600年)。

・本家支倉紀伊時正の移封 慶長5年、弟常成切腹の時、時正は支倉村から宮城郡中野村に移封、その後の支倉の地は六右衛門与市に支倉家の分家として与えられ、妻子を呼んで住むことに。長男常頼の処刑までの42年間、与市一家は支倉村に居住した。が、与市本人は出奔して12年間所在不明となっていた。慶長16年10月にソテロ、ビスカイノを伴い仙台城にて政宗に謁見した。

■六右衛門分家後、浪々12年間の謎・・・以下、六右衛門＝常長。

①実は、政宗は六右衛門に江戸にてソテロのイスパニア語などを学ばせていたのである。

・慶長14年9月、ソテロが通商船で新イスパニア(メキシコ)～フィリピン～母島に遭難上陸～上総国岩和田に漂着、幕府に保護された。15年、通商許可・宣教禁止令で宣教師を帰国させた。ソテロは大病で国内留め置き。徳川の許可で江戸浅草に診療所を運営、伊達政宗に知遇(政宗愛妾の病気を治癒したのは彼の友ブルギョ)を得て、政宗の援助で浅草に学校教会を建て、その学生に支倉六右衛門与市(40才)、本多上野介正純(45才)の名がある(「徳川遣欧史」)。ソテロと常長との初対面であった。

・慶長16年10月、常長は江戸からソテロ、ビスカイノを伴い仙台城に来て政宗に謁見。常長、ビスカイノは政宗の命で太平洋岸の良港探索に取り組み、ソテロは仙台で教会造りに専念した。

・慶長17年(1612)、常長は第一回目の使節としてサン・セバスチャン号でソテロとともに浦賀より出航するも、暴風に遭い座礁し遭難、仙台に戻っている。

②「治家記録」<sup>6</sup>に記された使節派遣までの計画・準備の様子

・派遣人員の人選状況をソテロに返した返書(1612年4月)によれば、この頃までに殆ど内定していた。

・幕府は、御船手奉行向井将監忠勝に全面的なバックアップを命じていたことが分かる。政宗が支倉常長を欧州に派遣した際に使用された船「サン・ファン・パウティスタ号」の建造の際には、向井将監は公儀大工や御内衆を派遣し、1613年9月出航に際しては航海安全の祈祷札「御祈祷ノ御守札」を届けさせている(9月6日)。

・1613年8月21日、政宗が城中大広間でソテロと対面したときの記事が面白い。「通詞を介して対面、白く縮れた手拭い(スカーフのことか)でたびたび唇を拭く。顔は赤く、鼻は高い。齢は60余とみえ、従者は24、5人あり、いずれも年若い」。ソテロはその後に大村で49才で殉教しており、1613年は40才であった。ここに記されたソテロは、同行していたビスカイノのことで、通詞が間違えてソテロと紹介したのであろう。ソテロは仙台に滞在して出航の準備をしていたらしく、9月1日にも登城している。

・同年9月15日、南蛮国へ派遣の政宗の使節一行が、牡鹿郡月浦を出帆した。「南蛮国へ渡さる黒船、牡鹿郡月浦より発す、支倉六右衛門常長と今泉令史、松木忠作、西九助、田中太郎右衛門、内藤半十郎、其の外、九右衛門、内蔵丞、主殿、吉内、久次、金蔵(以上6人氏不明)と云う者派遣さる、向井将監殿家人十人、南蛮人40人、都合百八十余人、……。此の時、数年本朝に逗留したソテロも帰国」と、乗組み員の氏名が明瞭に記されている。又、黒船について「材木の杉板は気仙、東山より伐

出し、公儀大工与十郎及び水手頭鹿之助・城之助兩人を将監殿より差し下され此の船を造る、造船奉行は秋保刑部頼重、河東田縫殿親頭」。船の規模について「横5間半、長さ18間、高さ14間1尺、帆柱16間3尺・松ノ木・・・」と記されている。⇒一般書では支倉六右衛門常長を正使、ソテロを副使として説明している。

\* 藩史では、正使;支倉六右衛門常長、副使;今泉令史、松木忠作(向井家臣)、医師;今泉舎寤、従士;西久助、小寺外記ら4名、従僕;「勘右衛門=常長長男の彦右衛門」ら19名。

### ③サン・ファン・パウティスタ号(1613年6月建造)の真相

浦賀沖で座礁したサン・セバスチャ号を浦賀で解体し船体だけとなったものを、海路雄勝町呉壺浜に運んで大改築され出来上がったのがサン・ファン・パウティスタ号であると考えられる。

月ノ浦は出航地であり造船地ではない。月ノ浦の地は、1611年12月に慶長大津波に襲われており、わずか1年後に造船場を整備し職人を集めることは至難の業と思われるのである。

## 4. 常長の帰国

常長が仙台に戻ったのは1620年9月22日。出帆から7年の月日が流れ、すでに政宗公も幕府の厳しい禁教令に従わざるを得ず、政宗公は常長に謹慎を申し渡したであろう。持ち帰った品々も没収され、慶長遣欧使節はその後250年間忘れ去られてしまい、明治維新を経て岩倉具視の使節がベネツィアで資料を見せられ、ようやくその業績に光があてられることになった。

貞山公治家記録には、元和6年(1620)8月26日、先にローマに派遣した支倉常長の帰朝に触れて「今日支倉六右衛門常長等南蛮国ヨリ帰朝ス、是去ル慶長18年・・・、南蛮ノ都へ到リ国王波阿波ニ謁シテ数年逗留ス、今更呂宋(ルソン)ヨリ便船ニ帰朝ス、南蛮国王ノ画像ト其身ノ画像等持参ス、…南蛮国ノ事物六右衛門物語ノ趣奇怪最多シ」と記している<sup>6</sup>。

南蛮国から持ち帰った国王画像、事物に触れただけで、政宗から国王に託した親書に対する返書の内容、派遣の成否など、今後の藩施策に関わることに一切触れていないのが異常である。

\* 使節はソテロをマニラに残し便船で帰朝した(パウティスタ号はマニラで買収される)とされる。

\* 遣欧使節のたどった軌跡、成果と失敗・・・専門書を参照ください。

## 5. 常長帰国後の仙台藩の扱い

遥々ローマまで往復した常長であったが、その交渉は成功せず、そればかりか帰国時には日本では既に禁教令が出されていた。帰国後の常長と一緒に渡航した者たち全員が川崎町大字本砂金(砂金村)に隠棲しており、自発的な集団隠棲ではなく藩によって決められた強制隠棲であったろう。

その2年後に失意のうちに死去したといわれている。棄教したとも言われたが、遣欧使節に加わっていたルイス・ソテロ神父が1624年に九州で書いた手紙では、常長は「敬虔のうちに死去」し、子供達には所領での布教は宣教師の保護を遺言したと記している<sup>7</sup>ことから、敬虔な教徒であったと思われる。

- ・1620年8月 常長帰国、仙台藩は幕府重臣土井大炊利勝に報告。
- ・マニラに残したソテロの処置を幕府に委任、常長は藩で処遇し穏便な処置を取ることを決めた。
- ・晩年における政宗の動きを追うと、60才を過ぎてから砂金村に川獵(川遊び)と称して毎年のように出向いた記事がある。政宗砂金に出向き秋保館に宿泊。1621年7月から1633年8月(67才)まで。

この間、1622年7月常長52才にて病死。同9月 幕府老中本多上野介正純が砂金一泊。山形藩最上家没収事務で正純出張の帰途か？本多正純は常長と一緒にソテロに学んだことがあった。

政宗公は西洋の見聞話を聴取し、信徒のこと、幕府の禁教政策との齟齬、藩主としての責任問題を整理し、必要な藩処分を下し、幕府に対してうまく立ち向かうための砂金出向であったろうか。

- ・1633年9月、常長嫡子(三男)勘三郎常頼を政宗護衛将校として江戸詰めに抜擢。
- ・1640年3月、家内キリシタン信徒の責めを負い常頼を処刑、お家断絶。・・・伊達諸記録になく、支倉一族処刑には不可解が残る。

\*ソテロであるが、1621年10月末、マニラから薩摩に潜入しようとして捕まり、大村藩の牢に投獄される。1624年7月、大村(現長崎県大村市)の放虎原で火刑にされ殉教(49才)。

## 6. 常長の死と墓

帰国後、キリシタンとしての処罰はなかった。支倉本家系図では元和8年(1622)7月、52歳で病死、仙台の北山光明寺に葬られたとなっている。しかしながら、常長の墓といわれるものは宮城県内に3ヵ所(仙台市青葉区北山にある光明寺、川崎町支倉地区の円福寺、そして大郷町の西光寺)存在する。「六右衛門常長の正統分明ならず」との疑問に、13代支倉常隆氏は、「そう申されても 父祖・歴代 光明寺の御墓守っています。13代目です」と明確に答えている。

昭和28年12月の新聞で下記の新事実が明らかになったと報道されたが、1948年の生まれと推定される(2016年交通事故死、69才) 13代常隆氏が、生前に光明寺の御墓守と、名言している通り、末裔にとっては歴代墓守し続けてきた光明寺こそが唯一無二の先祖の墓ということであろう。

「昭和28年頃、大谷村(現大郷町)東成田の東光寺から発見された当時の過去帳、位牌によれば常長はそれから32年後の承応3年2月17日大谷村で84歳で往生したという。大谷村にある古碑に「梅安清公禅定門」承応3年2月17日没と刻まれていることと、常長が死んだ後の過去帳、六銅銭、古位牌にも法名や没月日が明記されていることで、これ裏付けるように「命をもって海外に渡入し給いし人」という添書まである。また同村東成田には昔からキリシタン屋敷と呼ばれている支倉屋敷と馬場跡があり、キリシタン墓といわれる墓石も多数残っている。

常長はローマで洗礼を受け幕府の目が光っていたので、伊達政宗は一計を案じて常長を大谷村東成田に匿い、架空の墓を仙台に作ったのだらうといわれている。



仙台の墓は切支丹の制裁をのがれて隠居した常長を匿い幕府の目をゴマ化するための、カラクリの墓だったのか。

先々々代住職の佐藤宗岳師の研究書を大郷町教育委員会が発行したのを機に、常長メモリアルパークとして公開されている。

## 7. 常長死後の支倉家の改易、再興の謎

その後の支倉家は嫡男常頼が後を継いだ。寛永17年(1640)、家臣がキリシタンであったことへの責任を問われて処刑され断絶した。しかし寛文8年(1668)、常頼の子の常信の代にて許され家名を再興した。その後、第10代当主の代まで宮城県黒川郡大郷町に、第11代から現在の第13代支倉常隆、そして第14代支倉正隆に至るまで、宮城県仙台市に居を構え続けている。また、支倉常隆氏は日本国内ならびに世界各国を周って先祖の常長の功績を伝えたが、2016年交通事故で死去し、現在はその子正隆氏(現在尼崎市在住)が引き継いでいる。仙台市支倉町の名の由来は支倉常長の養父支倉紀伊時正の屋敷があった(当時は支倉丁)ことによる。

支倉常長は大正13年(1924)、正五位を追贈されている。1668年の家名再興は、常長を匿い架空の墓も仙台に設けた政宗が、苦勞をかけた常長に報いる措置だったのであろうか。

## 8. 政宗の使節派遣に関する疑問と政宗の真意

### ①使節に支倉常長が選ばれたのはなぜ？

朝鮮出兵の際海外で過ごした経験や、鉄砲組・足軽組頭の経験から一行を統率する能力を評価されたという説。また、一度実の父が罪を犯し、常長も仙台藩を追放されたが、能力を惜しんだ政宗が名誉挽回の機会を与え、慶長使節の正使という大役を任されたとも言われている。いずれにしても史料が失われているため、その真相はわかっていない。

慶長5年から12年までの常長分家後の12年間の空白が後に明らかになり、政宗公の命令により正使となるべく育てられていたという説明がなされていた(3節六右衛門分家後、浪々12年間の謎参照)。

### ◆常長の使節抜擢理由の新説;「常長追放文書」の発見による提起

僅か600石取りの中級藩士支倉常長が、なぜ遣欧使節団の使節に抜擢されたのだろうか。

昭和61年、謎とされる常長の使節抜擢理由を決定付ける史料が、仙台市博物館内で発見された。実父常成の切腹と常長の追放を命じた茂庭石見綱元宛の政宗の書状である。

「支倉飛驒事、去年以来召籠分に而指置候、然者、此内弥以不届義候条、唯今申付候て腹をきらせ可申候(中略)子ニ候六右衛門尉事も、親子之義ニ候間、命ハたすけ、追失可申候、八月十二日 政宗(花押)茂石見殿」

主旨は「昨年以來、不届きの罪を犯して幽閉を命じていた常成が、さらに罪を重ねたため、本日ただいま、切腹を決定する。子息の六右衛門常長は、本家の養子となつてはいるものの実子であるため命は助け追放を命ずる」という。父・常成の切腹は1600年のこととされる。

常成の犯した罪は不明だが、奉行を二人立てて斬罪でなく切腹を、政宗が重臣茂庭綱元に直々に命じるとは、よほどの重罪だったのだろう。しかも養子に出ていた常長までが縁座制で追放処分にされたのである。この常長追放文書は、1619年11月30日にイエズス会宣教師アンジェリスがローマのイエズス会総務会長宛てに報告していた下記の内容を裏付けるものだった。

「政宗は大使としてあまり有力でない一家臣を遣わしました。政宗はその父(常成)を幾つかの詐欺のため数か月前に斬首することを命じました。今、大使として指名した息子(常長)もまた日本の習慣に従い斬首するつもりで、彼が所有していた僅かな知行を既に没収していました。政宗はその死をスペインおよびローマまで行って経験する難儀と引き換えるほうが良いだろうと判断し、彼が航海の途中で死んでしまうであろうと考え、彼を大使に決定しました」

政宗は常長が二度と日本には帰れないと考えて死罪に代えて大使役に任じた、と報じていたが、ザビエル以来、日本での布教の主導権を握ってきたイエズス会が、遅れて日本に進出してきたフランシスコ会の宣教師ソテロが政宗に働きかけて始めた遣欧使節派遣の成功を妨害するために、大使に任ぜられた常長の人格と身分を貶めようとする悪意が感じられ、その信憑性が疑問視されてきただけに、常長追放文書発見の衝撃は大きく、いかようにも解釈できそうである。

「歴史読本」の昭和62年新年号に、発見当時の仙台市博物館学芸室長で現慶長使節船ミュージアム館長の濱田直嗣氏が新発見文書を発表している。が、しかし、6節の常長の墓、7節の支倉家再興に関する史料を読む限り、政宗は常長の業績を買っていたと考えざるを得ず、「常長追放文書」は幕府の目をごまかす第2弾と考えるのが妥当ではないかと、浅学の筆者は考えている。

## ②政宗の派遣の真意

家康がメキシコと直接貿易の途を開こうとして交渉を始めたのは慶長14～5年のことで、政宗もこの家康の意を受け、メキシコと貿易を開く目的で黒船を建造したというのである。スペイン出身のフランススコ派伝道師ソテロは、メキシコがスペイン領である関係から仲介の労を取り、自己及び所属する教会の日本における立場を有利にしたいと奔走したのであろう。政宗の黒船渡航の目的は貿易の利益であり、家康にも恩を売ろうとしたと一般的には考えられている。

しかし、治家記録の「今度、公、南蛮へ船を渡さる事、其の地の様子を檢察せしめ、上意を経て攻取り玉ふへき御内存なりと云う」という一節の解釈では、軍事的な実情偵察、豊臣秀吉の朝鮮出兵と一脈相通ずるような戦国武将的動機が存在したのではないかという説もある<sup>6</sup>。

## ③政宗の派遣に関する新しい解釈……慶長大地震からの藩の復興<sup>8</sup>

慶長大津波からわずか2週間後、政宗は造船と慶長使節派遣の構想を明らかにし、その2年後、サン・ファン・バウティスタ号は月浦からヨーロッパへ向かって出帆した。

このような事実を踏まえ、改めて慶長使節派遣の意義を問い直してみたとき、この計画には大きな災害から立ち直るための強い意志が託されていたのではないかという新しい解釈が生まれたのだ。

政宗と常長が目指した海外との貿易は、物資の流通のみで終わるのではなく、文化や技術・情報・人の交流ももたらしてくれる。そしてそれは**復興の基盤**になりえるのである。

私たちが経験した東日本大震災のちょうど400年前、まさに復興の最中に、慶長遣欧使節は大航海時代に打って出たのでないか。使節を派遣した伊達政宗は、震災によって大きく傷ついた仙台藩を、より良い国に発展させようとしたのではないか、という新しい解釈が提唱された。

## 8. 現代に生きる子孫

・常長の直系子孫(分家)は、**13代常隆氏**が400年記念行事においてスペインに招かれたほか、国内外で支倉常長の業績を紹介したり、日本人を祖先にもつハポン姓の人々との交流に努めていたが、2016年1月、交通事故により死去された(享年69)。現14代当主は、**正隆氏**である。



A



B



C



D

・宗家は19代以降は不分明。**29代哲男氏**は2011年死去(享年92)との記事がある。

**写真A**常長直系 13代支倉常隆氏、**B**常隆氏 2015年 日本スペイン交流400周年にて **C**14代当主正隆氏、2017年11月、スペイン在住で日西支倉常長協会会長のファン・フランシスコ・ハポン・カルバハルさん(48)が来日し、正隆さん(49)(尼崎市在住)と対面、**D** 2005年愛知万博 ビクトリア号の前で握手する支倉哲男さん(右)とマヌエル・カルバハル・ハポンさん。

・支倉家の家紋は「右卍」とされる。400年記念行事において支倉家がスペインに招かれたが、13代支倉常隆の肩衣と陣笠には右卍の家紋が使われている姿が残っている(写真B)。

\*仙台藩歴史事典には、支倉姓の**幕末の大番組藩士**は3名記載。金治30石、伝四郎30石、斎150石。これら3名と支倉本家、分家とのつながりを確定できる情報は持ち合わせていない。

## 9. スペインとの交流

スペイン南部のセビリア近郊にあるコリア・デル・リオ市。人口3万人の町には、ハポン(スペイン語で日本の意味)という名字の人が600人ほどいる。慶長遣欧使節のうち、現地に残ってハポン姓を名乗った藩士らが出て、彼らはサムライの末裔だと信じられている。2011年の東日本大震災の際には、コリア市のHPで市長は「1万500<sup>キ</sup>。先の親類へ。こちらに避難したいという方には市民権を与えます。皆さんの悲劇を自分のことと同じように感じていますから」と呼びかけた。震災後、市旗は半旗にされ、川沿いに建つ常長の像には花や祈りを捧げる市民が絶えないという。

## 引用文献

- 1「伊達世臣家譜」支倉、 2 檜山巖著「支倉常長の絵て」、 3 坂田啓編「私本仙台藩士辞典」、
- 4「仙台藩家臣録」支倉又兵衛、 5「仙台人物志」屋代勘解由兵衛伝、 6 「貞山公治家記録」、
- 7 『読売新聞』よみほっと(日曜別刷り)2021年2月7日1面【ニッポン絵ものがたり】、
- 8 サン・ファン館HP <https://www.santjuan.or.jp/history.html>

## 【補足】 支倉常長の没年、墓

	仙台 光明寺	川崎町 円福寺	大郷町 東光寺
寺の起源	伊達氏始祖朝宗夫人・光明寺殿の菩提寺。1604年伊達郡国見から仙台北山に。	平安後期創建。本尊は塑像の延命地藏菩薩、脇仏にマリア観音像。	臨済宗妙心寺派
常長の没年	1621年 享年51	1622年7月1日 享年52	1654年2月17日 享年84 <b>過去帳、位牌発見</b>
墓碑銘	読めない	読めない 背後の墓標は1994年建立	読めない
案内板特記	墓の所在は異説あり	支倉家の菩提寺 マリア観音は隠れキリシタンの証拠	故佐藤宗岳師の研究 「命をもって海外に渡入し給いし人」という添書も発見。
墓			

## 大郷町東光寺の「常長メモリアルパーク」の説明…大郷町HPより

大郷町の「安戸」は支倉家の屋敷跡がある場所で、常長の孫常信と曾孫常角が住んでいた。北にある桂蔵寺にはその墓がある。東成田の支倉家中の伊藤家では、常長から伝わったとされる所持品の中に、マリア観音小軸と常長宛ての表具料領収書『阿まと 六右衛門殿 辰正月十八日』が見つかっている。阿まと＝安戸、辰年は1628、1640、1652年(常長82才)に当たるので、享年84という信憑性が増してくる。

大郷町東成田西光寺地区の山の中に東光寺がある。奥に墓があり「此の墓は、支倉六衛門様という人のお墓で、六衛門様は伊達政宗様のご命令でローマへ使いをして帰って来たが、ご城下にいると公方様(将軍様)から殺されるかも知れないので、政宗様のお指図によりこの在郷に隠れ人となって暮らした人である」という口伝がある。

この口伝が伝わっている地区では、正月に小豆粥を煮た赤味色の煮汁を、家の入り口や周囲にふりまき、悪疫や魔障が入らないよう、また五月節句に用いたヨモギを乾燥させ保存し、正月に家族の顔と胸に十字を書いて病に罹らぬまじないをするという、キリスト教の教義に基づく風習が残っている。

以上